



## 巻頭言「資料室の使命」

資料室運営委員会委員長  
理事長・学院長 佐々木哲夫

★

35年ほど前、新共同訳聖書翻訳事業に携わっていた東京神学大学教授左近淑（きよし）先生が仙台東六番丁教会の小さな集まりで聖書翻訳に関する講演をされた。その中で旧約聖書研究に言及し、日本では写本発見などの本文批評的研究は困難であり、専ら『ビブリア・ヘブライカ・シュトゥットガルテンシア』（BHS）に基づく新しい解釈を提示するなどの文献学的研究になると話された。米国で5年間ほど旧約聖書の学びを経た後の研究について模索中だったこともあり、先生の講演は私に光明となった。爾来、キリスト教学校に奉職しつつ、BHSに基づく研究や説教に携わっている。

★★

2022年10月26日に宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所主催の公開研究会「悲しみを語り伝えるために―旧約聖書にみる語り部の格闘―」が開催された。講師は青山学院大学教授左近豊（とむ）先生である。先生は、名前から推察されるとおり左近淑先生のご令息である。ご自身の研究に基づくご講演を頂いた。「震災直後には言葉も壊れて押し流された。…時間が経てば日常が戻り、記憶は薄れる。…失われた言葉を想像し…喪失感を表現する言葉を見つけられずにいる」などの文章を引用しながら主題を解説され、悲哀の感性を言葉に回復する事例として聖書『哀歌』を分析し紹介された。

豊先生の講演に淑先生のかつての講演を重ね合わせながら拝聴させていただいた。淑先生の岳父左近義慈（よししげ）は、東京神学大学における淑先生の修士論文指導教授であり『ヒブル語入門』の編著者である<sup>1</sup>。さらに義慈の実父左近義弼（よしすけ）は、青山学院大学の教授として聖書語学や旧約聖書学を講じた研究者であった。日本における旧約学研究の一系譜である。そのようなつながりを概観していた時、左近義弼に関し「1903年8月22日に津田まつと結婚。まつは津田端・まさの三女で、宮城女学院を卒業している」との一文に遭遇した。宮城女学院とあるが、それは当時の宮城女学校であり現在の宮城学院である。津田まつさんの卒業に関し宮城学院資料室佐藤亜紀さんが調べた。

★★★

<sup>1</sup> 大野恵正「解説」『左近淑著作集第一巻学術論文集』教文館1992年393頁。左近義慈編著『ヒブル語入門』教文館1966年。

1899（明治32）年宮城女学校第7回卒業生に津田まつの名前があった。配偶者の記録もあり当人であることが確認された<sup>2</sup>。記録にはカント哲学者で東北学院、明治学院、横浜共立学園につとめた笹尾糸太郎の名前も見うけられる。また、同年の宮城女学校卒業生5名の写真も保存されていた。しかし、名前の併記がない。肖像との同定は一瞥では不可能である。

安部やす（笹尾糸太郎氏夫人）  
菊地とら（加藤興五郎氏夫人）  
小泉はる（磯村源透氏夫人）  
森 かの（酒井勝軍氏夫人）  
津田まつ（左近義弼氏夫人）

第7回卒業生



<sup>2</sup> 『校報—私立宮城女学校—』第二号 1918（大正7）年、34-35 頁。本稿では「左近義慈」「左近義弼」「津田まつ」は歴史的人物とし敬称略で表記した。

ところで、同期生の小泉はるは、1986年NHK連続テレビ小説「はね駒（こんま）」の斉藤由貴扮する主人公橘りんのモデルになった人物である。小泉はるは、1877（明治10）年、福島県中村町（現相馬市）に生まれた。中村高等小学校卒業後、キリスト教主義の教育を受けようと仙台に出て宮城女学校に入学する。在学中から近所の子供たちに英語を教えるなど英語力はかなりのものだった。卒業後すぐ母校の教壇に立ち4年間国語と音楽を教えた。退職上京し実業家磯村源透と結婚。さらに、英語力を磨くために日本女子大英文学部に入学し津田梅子らの指導を受けた。やがて報知新聞の記者となり、後に米国大統領となるタフトとの単独会見や女性日本初飛行船乗船などドラマのような活躍をした<sup>3</sup>。宮城女学校教員時代の写真が存在していたので小泉はるが卒業写真前列中央の人物であると判明した。残る4名のいずれが津田まつかである。

卒業写真の判定を左近豊先生に依頼したところ、晩年の左近義弼ご夫妻の写真が送られてきた。また、卒業写真後列右の人物が津田まつと判断される旨ご返事もいただいた。



左近義弼夫妻

1901（明治34）年2月2日、富田氏宅にて福島伊達教会婦人会が開催された。笹尾条太郎、ファウスト、五十嵐正、シュネーダー夫人、ファウスト夫人ら約60名が参加している。そこに津田まつは、宮城女学校一年制聖書専攻科で学んだ後、通訳婦人・婦人伝道者として出席し、同日付で飯坂教会に赴任している。無償にて派遣されている件につき飯坂教会より宮城女学校ワイドナー宛感謝状が贈呈されている<sup>4</sup>。同年10月18日夜には飯坂

<sup>3</sup> 「光あおいで（6）—仕事と家庭を両立ドラマ地でゆく行動派—」『河北新報』1986年9月25日（木曜日）。

<sup>4</sup> 福島伊達教会百年史編集委員会『日本基督教団福島伊達教会百年史年表』1991年26-27頁。

教会の村上長老宅にて植村正久の説教会が開かれている。来会者は100名程であった。その後の飯坂教会は、1903年3月に市村牧師の飯坂教会辞任を教会総会にて承認するも教会解散は否決するなど教勢困難の様相を呈している<sup>5</sup>。津田まつは、同年8月22日に左近義弼と結婚し、10月に夫婦で米国に帰化している。

★★★★

文献学的研究は一次資料の発掘や資料の新解釈の提示が肝要であるとの左近淑先生の講演内容が想起される。津田まつに関する今回の調査は、一次資料の発掘やその解釈などの作業を適用したものだ。

今般『宮城学院資料室年報—信望愛—』に4本の原稿が寄せられた。松本周先生「宮城学院と『初週祈祷会』—押川方義を介して—」は、日本人初のプロテスタント教会である日本基督公会成立の発端となった宣教師バラの祈祷がなされた初週祈祷会を宮城学院新年礼拝の源流とする論考である。小羽田誠治先生「『橄欖』にみる『愛のある知性』」は、宮城学院女子大学のブランド・コセンセプト「愛のある知性」が宮城女学校以来の教育に通底する理念であることを1921年に創刊された雑誌『橄欖』の作品から探り出そうと試みた論考である。佐藤亜紀氏『宮城女学校の戦時期学籍簿の検討—出身小学校の地域と保護者の職業—』は、昭和12年から16年の学籍簿に記載されている生徒の出身小学校の地域や保護者の職業の分析によって仙台の世相と宮城女学校の存立意義の関連について論考する。『大正期の宮城女学生たち—清水アイさんご家族ご寄贈写真から—』は、題目のとおり当時の写真とその裏書きを若干の解説を加えて紹介したものである。貴重な一次資料である。

宮城学院の歴史に関する調査研究や記録保存公開は、宮城学院資料室が担っている使命でもある。

---

<sup>5</sup> 同『百年史年表』33-34頁。